

## ハイデガーにおける大学改革論の構想と展開 ——哲学と諸学問<sup>1)</sup>との連動——

黒岡 佳桓\*

### はじめに

アレントの回想によると、第一次世界大戦後のドイツの大学では、「全学部における大学の教育および学習運営に流布した不満」が噴出していった<sup>2)</sup>。大学で講じられる哲学は、新カント学派や新ヘーゲル学派等の既存の理論を学生に提供するだけに終始し、多岐にわたる専門領域へ分化しつつも、哲学はそれらを調停できずにいた。ここから哲学や学問一般への不信感が蔓延していったのだが、その真っ只中で教壇に立った若きハイデガーは、そうした大学教育に対する「反逆的なところ」が効を奏し、「思索という領土の王」として一躍注目を集めていったという<sup>3)</sup>。こうしたハイデガーの、当時の学問的体制への反発意識が、1930年代のナチズムに親和的となった時期に顕著に表明される、彼の大学改革の試みへと結実してゆくであろうことは、われわれの想像に難くない。そして、このハイデガーの政治的アンガージュマンの時期と、彼の大学改革論が高らかに表明される時期が重なっているという事実は、先行研究において、彼の試みを単なる時局的なものとして扱い、そこにおける学問的意義を顧みないという解釈を推し進めてきた。ペゲラーやレーマンなどの解釈は、まさにその模範である<sup>4)</sup>。しかし、ハイデガーの大学改革という試みが、当時の学問や教育への不信を何らかの仕方で克服しようとしたものであったならば、大学改革という構想は、そうした学

---

\* 立命館大学文学部非常勤講師・立命館大学人文科学研究所客員研究員  
E-mail : ky813@ebony.plala.or.jp

問的動機を踏まえて、第一に理解しなければならないと考えられる。こうした問題提起から本稿は、ハイデガーの初期講義における大学への問い、および学問一般への危機意識を参照しつつ、ハイデガーの大学改革という試みを、諸学問の哲学化を通じた大学の刷新という点に定めて考察し、その試みを単に時局的、政治的な観点からではなく、学問的意義から照射することによって、明らかにすることを目的とする。

こうした大学改革の学問的意義を強調する作業は、ハイデガーが初期講義において、大学の在るべき姿や、哲学と諸学問との区別に言及していることから動機づけられる。1919年の講義「原学問としての哲学の理念と世界観問題」では、すでに大学改革の語が冒頭に掲げられている。それは、「学問の理念が […] 直接的な生の意識にとって、その生の意識のなかへと、なんらかの仕方では改変しつつ介入すること」によって、「新たな意識態度と同時に、精神に属する生の動性の固有な形式への移行をもたらす」ことである(vgl., 56/57, 3)。このばあいの学問とは、まさに諸学問の根底にある「原学問 Urwissenschaft としての哲学」(56/57, 3f.) であって、この点で、哲学による「真正な学問的意識と生の連関との再生 Wiedergeburt」(56/57, 4f.) が、改革という名のもとで目指されるのである。また、この講義と同時期に「大学と学術研究の本質について」という講義も行われている<sup>5)</sup>。これらをうけて、1921年から1922年の講義『アリストテレスの現象学的解釈／現象学的研究入門』では、大学の在り方が生の問題と絡められ、比較的詳細に検討されることになる。この後、大学への言及はしばらく沈黙するものの、1928年から1929年の講義『哲学入門』において、大学は「現存在と存在者とのあらゆる関連が、変転を経験する」決定的な場として、再び表舞台に登場することになる(vgl., 27, 7)。このようにみれば、ハイデガーの思索の展開には、アレントが回想する学問的情勢を背景とした、当時の大学や学問の現状への深い懸念と問題意識が、脈絡と流れていたといえるだろうし、彼の大学改革という野心もまた、1930年代の時局的な背景から偶然的に浮上したわけではない

と判断できよう<sup>6)</sup>。こうした事情から、ハイデガーの大学改革の内実を解明するには、彼の初期講義における哲学や諸学問への問いを踏まえることが必須の課題となるのである。

以上から、本稿の構成は以下ようになる。まず1において、ハイデガーの大学改革の動機を簡単に示しつつ、彼の初期講義における大学論の内実とその不徹底を指摘する。そして2において、彼の大学改革論を、哲学と諸学問との協調関係を軸として際立たせ、ハイデガーが構想していた大学における学問の本来の在り方を明らかにする。最後に3では、2において明らかとなった哲学と諸学問との関係性を、諸学問の哲学化として捉え直し、その内実と積極的な意義の解明へと考察を進めることにする。

こうした考察において本稿は、ハイデガーが当時身を置いていた政治的情勢と大学改革との親和性を強調するのではなく、それとして重要である政治的な観点を一端カッコに入れることになるのだが、逆にそうすることで、彼の試みの学問的な側面に焦点を当てることを目指すものである。この意味で、「彼〔＝ハイデガー〕の学長としての活動は、彼の哲学的な展望という背景にして探求されるべきである」とするフェヒャーの立場を本稿は重視し、ハイデガー理解の新たな観点を提示することを試みる<sup>7)</sup>。

## 1. 未完成に終わった1920年代の大学論

### ——学問の危機と現実的な生の問題から——

渡辺が指摘するように、ハイデガーが教壇に立ちはじめたのは、「近世的な認識論的論理学が瓦解」したことにより、「具体的な生の現実、或いは存在への下降の道」が模索されていた時期であった<sup>8)</sup>。こうした当時の傾向をうけて、1920年代初頭のハイデガーもまた、哲学の課題を「生の現実性 *Faktizität des Lebens* を維持し、現存在の現実性 *Faktizität des Daseins* を強固にする」(59, 174) ことに定め、その解明のための方法論の考案に尽力す

ることになる<sup>9)</sup>。まさに現存在の「現事実的な生」こそが、現象学としての哲学の「根本現象」と定められるのである (vgl., 61, 80)<sup>10)</sup>。そしてこの「現事実的な生」の探究——それは『存在と時間』の実存論的分析論として深化され、独創的な方向をたどるのだが——には、哲学や諸学問が人間の生から乖離したことによる、学問への不信感を克服しようとする野心が潜んでいる。1928年から1929年の講義『哲学入門』では、ハイデガーは第一次世界大戦後の情勢を振り返り、そこに「大学の学問運営における硬化」と「専門化」に対する、「学問の革命についての訴え」があったと述べている (vgl., 27, 27f.)。こうした当時の「学問の危機」(27, 26)は、ハイデガーによれば「学問自身の内的本質構造における危機」「われわれの歴史的 - 社会的現存在の全体における学問の地位に関する学問の危機」および「個々人が学問自身に関わることにおける危機」という3つの危機の複合体である (vgl., 27, 27)。なかでも「個々人が学問自身に関わることにおける危機」と「われわれの歴史的 - 社会的現存在の全体における学問の地位に関する学問の危機」とは、人間存在にとって、学問の重要性が不明瞭になったことに起因する、人間の生と学問的営みとの極度の乖離のことである。ハイデガーは、こうした危機の根を「学問というものが、人間的現存在そのもののなかでいかに本質的であるのかということが、そもそも無規定で不明瞭であるという点」に看取する (vgl., 27, 29)。そして危機に陥った人間と学問との関わりを再び回復するためには、学問を「人間的現存在そのものの連関のなかで、その根本体制に基づいて把握されなければならない」(27, 30)と主張されるのである。その危機は、彼が「諸学問の大衆化 Popularisierung」(27, 31)と呼ぶ、研究成果の公的な是認と使用によっては克服されえない。むしろハイデガーにとって、「学問は成果において、そもそも学問としては決して暴露されえない」のであり、「大衆化」は「学問の本質に逆らって進行する」ものである (vgl., 27, 32)。つまり「現事実的な生」の探究とは、人間の学問的営みの意味を、その成果の有用性によって確定せずして、「人間的現存在そのものの

連関」のなかに基礎づけ、そしてその作業によって学問を人間的な生の次元から捉え直すことであり、それによって哲学および諸学問は、それぞれの危機を打開する可能性を与えられるということになろう。そしてこの可能性は、先述した「学問自身の内的本質構造における危機」に内在する「基礎づけの危機 Grundlagenkrise」(27, 35) ——これは2において議論する——への真摯な対応に賭けられてゆくことになるのである。

こうしたなか、ハイデガーはしばしば、「現実的な生」への問いと、大学への問いとを重ねて理解している。1921年から1922年の講義『アリストテレスの現象学的解釈／現象学的研究入門』（以下、講義『アリストテレス』と略記）では、大学は「生の連関」とみなされ（vgl., 61, 63）、そこから「現実的な生」や歴史についての考察が展開されている（vgl., 61, 80）。「生の連関」のひとつとしての大学は、「自己世界 Selbstwelt」「共世界 Mitwelt」「環境世界 Umwelt」へと分節可能な、自己、他者、事物へと包括的に関わり合う場である（vgl., 61, 63）。そしてこうした関わりの中で、哲学は「その都度の存在（存在の意味）」(61, 60)を問うのであり、学問の遂行者と分離した存在者の探究に終始せず、存在者と関わっている哲学者のまさにその存在を問うことになる。「哲学することへの接近的な関わりは、そのわれわれにおいて〔…〕規定されねばならない」とハイデガーが述べるのも、こうした過程においてである（vgl., 61, 63）。となれば、「生の連関」としての大学が変容を蒙るとすれば、それは哲学するわれわれの「現実的な生」が解明されたばあいのみとなろう。この点で大学変革は、問う者の時間、空間的な制約を受けつつ遂行されることになる。講義『アリストテレス』——この講義は、まさにこの講義を聴いている聴衆の「その都度の存在」に向けられている——においてハイデガーが「生の連関」を大学に限定するのは、まさに哲学の遂行に必然的に課せられたこの時空間の制約に依拠しており、決して恣意的な決定ではない。大学の変革には、人間がいまここで、自らの生を問いただすことが条件となるのである。

こうした大学改革の方向性は、極めて楽観的に響くにせよ、ハイデガーの「反逆的なところ」が顕著に現れていると思われる。というのも、大学の変革は、結局のところ、哲学がわれわれの具体的な生に、いかに真摯に眼を向けるかに懸かっており、大学において学ばれる専門的な哲学的教養や知識の摂取全般を全く度外視しているからである (vgl., 61, 41)。さらにまた、哲学は大学という既存の場において遂行されることを必ずしも必要としない。つまり、哲学が「その都度の存在」への問いという道から逸れないかぎり、それが大学の外部で遂行されようが、内部で遂行されようが関係はなく、またそうした遂行の内外が含意されていないかぎり、「哲学と大学哲学との同一化」(61, 65) もまた主張されているわけではない。哲学にとって堅持されねばならないこと、そして哲学を営む者に必然的に課せられている事柄、それは自己、他者、事物へと、いまここで関わっているわれわれの「その都度の存在」を問うことにあり、それ以外ではないのである。

だが翻って、大学側がこうした哲学の在り方に対して何らかの仕方で貢献しないかぎり、大学の存立の意味がなくなるのではなからうか。つまり、大学から哲学への特権的なアプローチがないならば、いかなる意味にせよ、大学は無用となるだろう。こうした問題圏において、ハイデガーは大学を大学として成立させる根拠を「伝統 Tradition」に求める (vgl., 61, 75f.)。大学が大学として意味をもつのは、「大学の「歴史的 *historisch*」性格」(61, 69) によってであり、哲学がこの「伝統」に呼応したばあいのみである。つまりそれは、「現実的な生」を問うなかで、問う者が自らの「伝統」を発見することである。1933年の学長就任演説「ドイツ大学の自己主張」においても、「ドイツ民族の歴史的 *geschichtlich* で精神的な委託 Auftrag」(16, 108) が主張されていた<sup>11)</sup>。そこで大学における哲学が意味を見い出すのは、「歴史的で精神的な委託」が、大学という場において哲学を営む者の「現実的な生」に課せられるかぎりにおいてのみであり、「ギリシア哲学の開花 Aufbruch」(16, 108) を引き受けるばあいのみである。この議論は、先述した「大学の

「歴史的」性格」の発展形であるだろう。ハイデガーにとって、大学が大学として意味をもち、さらに大学が哲学に寄与する契機、それは資料収集から導きだされた事実検証の積み上げによって構築される歴史学ではなく、そうした歴史を可能にする歴史であり、ギリシアの遺産の継承なのである。

講義『アリストテレス』でも歴史は議論されているが、後の『存在と時間』のように、現存在の「歴史性 Geschichtlichkeit」と「歴史学 Historie」との区別はなされておらず、それゆえ大学の「伝統」の議論は深化していない<sup>12)</sup>。「大学の「歴史的」性格」は、「われわれ自身の現実的で歴史的 historisch な生」(61, 78) から着手することを要請されるのだが、そもそも上記の用語上の混乱があるため、大学をそこから解明するところの生に関しても、その歴史的性格は明らかにされていない。さらに、当時のハイデガーは「現実的で歴史的な生」のなかでも、特に「現実的な生」の分析に注目しているため、「歴史的な生」や「大学の「歴史的」性格」は、その分析の背景に退いてしまっている。こうした意味で、1920年代初頭の大学論は、1930年代に明確化される大学論の下図を描いているといえようが、「歴史的な生」および「大学の「歴史的」性格」の分析が不十分なまま、「現実的な生」の分析を先行させたことにより、意欲的な試みにもかかわらず、未完成のまま放置されたと診断できるのである。

ここでは議論の展開上、ハイデガーの「歴史性」の議論にまで踏み込むことはできない。また同じ理由から、この「歴史性」の議論と、大学との関わりの詳細な検討も不可能である。しかし、ハイデガーの大学改革の構想には、当時の「学問の危機」を克服するという背景が、排除できない仕方含まれているということ、そしてその克服の仕方が、後に実存論的分析論として展開される「現実的な生」の解明に懸っているということ、この2点を踏まえば、彼の大学改革は、もっぱら時局への政治的対応策としてのみ考案されたわけではなく、そこには大きな学問的動機が無視できない仕方働いていたということが理解されることだろう。次に明らかにせねばならないの



は、この「現実的な生」の分析が、いかにして「学問の危機」の乗り越えとして機能するかということ、この点である。

## 2. 根本概念を巡る哲学と諸学問との連動性

大学改革が、「現実的で歴史的な生」を問うことから遂行されるとしても、それはどのような仕方でも可能なのだろうか。この問いの解明から浮かび上がってくるものは、先に触れた「基礎づけの危機」の克服を目指す、哲学と諸学問それぞれの概念への精査と、そこにおける哲学と諸学問との独特の相互関係である。

ハイデガーはまず、哲学と諸学問とを、その対象領域の相違によって明確に区別する。講義「原学問としての哲学の理念と世界観問題」において、ハイデガーは「生の動性の固有な形式」への高まりを牽引するものが、「原学問としての哲学」だと主張していた (vgl., 56/57, 3f.)。他方、「原学問としての哲学」以外の諸学問は、すべて「個別学 Einzelwissenschaft」と呼ばれ、この「個別学」の根源に「原学問としての哲学」が位置づけられている (vgl., 56/57, 24f.)。例えば物理学は、その対象領域が「物的 - 世界、物質的自然」であるかぎり、そこから「生命を持った」自然が排除されることになる (vgl., 56/57, 25)。つまり「個別学」は、その対象領域に関して「他のものとの境界をもつ」のであり、「対象領域の制約性」を免れえないのである (vgl., 56/57, 26)。そして「個別学」は、そうした特定領域の存在者を人間の生から切り出し、対象化する。したがって「個別学」は、対象を生領域から切り離し、切り離された対象を観察しつつ理論化する学問であり、この意味でそれは「脱 - 生 Ent-leben」という傾向をもつのである (vgl., 56/57, 74/77f.)。つまり「諸々の生世界は、学問によって脱生化という傾向へと取り込まれ」、それによって「現実的な生は、まさに自らの現実的に生き生きとした遂行の、本来的に生き生きとした可能性を奪われる」こととなる



(vgl., 58, 77f.)。総田氏の言葉をかりれば、こうした「脱生化」へ向かう「個別学」は、「全体存在する生を諸領域へと断片化する」ものとなる<sup>13)</sup>。他方、「原学問としての哲学」は、「諸々の対象領域のすべてにとって共通なものについての学問」、「普遍的な存在についての学問」とされる (vgl., 56/57, 26)。つまり、存在者の特定の領域を研究する学問が「個別学」であり、「普遍的な存在」を問う——つまりこれは、存在者全体を問題にする——学問が「原学問としての哲学」というわけである。ここで哲学の使命は、確定される。それは、生を断片化せずして全体として把握しつつ、存在者全体を問うことである。「現存在が本質的となること、すなわち存在そのもの *Sein als solches* へと明確に問うことは、哲学すること *Philosophieren* にほかならない」(27, 213) のであり、またそれは「己を絶え間なく隠蔽する存在者全体の真っ只中で、問いつつ持ちこたえること」(16, 110)、「存在者全体 *das Seiende im Ganzen* に立ち向かい、それを存在している存在者として問いかけ、把握する」(16, 109) こととなる。いわゆる哲学は、存在者を超えて、「存在そのもの」を問うことで、存在者の特定の一領域ではなく、その全体を射程に収めるのである。この点で、哲学と諸学問は、決定的に異なることになり、この区別は、後年になってもハイデガーによって破棄されることはない。

だがこうした区別があるにもかかわらず、ハイデガーは哲学も「個別学」としての諸学問も双方同じく、それぞれの学問理論を構築する際に使用する概念の意味を、おのおのがしっかり会得することを要請する。1924年の講義『アリストテレス哲学の根本概念』では、「学問を選択した者は、その概念に対する責任 *Verantwortlichkeit* を引き受けた」とされ、学問一般を営む者の心構えが説かれることになる (vgl., 18, 6)。つまり、学問的研究が意味を持つのは、漠然としたままの概念を使用しつつ理論を構築し、新たな成果を生み出すことによってではなく、「概念性の研究の遂行」に他ならないのである (vgl., 18, 14)。この意味で、当該の学問が漠然とした理解のもとに使用し

ている概念を、その理論構築に先立って問い直すことが、哲学や「個別学」の研究にとって、最も肝要な事柄となる。「きみたちの学問の事象 *Sache* へと、真正の、正当で真剣な *ernsthaft* 関わりを持つこと」(18, 15) をハイデガーが提唱するのも、以上の理由によってである。

こうした自らの学問が使用している概念への問いは、先述の「学問の危機」において触れた「基礎づけの危機」の克服に大きく関わってくる。なぜなら、「基礎づけの危機」とは、各々の学問の理論の命綱である「根本概念」(27, 36) が曖昧となり、当該の学問の存立が危うくなる事態であるから、概念への問いは、最終的にはこの「根本概念」への問いとしても遂行されることになろう<sup>14)</sup>。この事態は、『存在と時間』においても、明瞭に語られている。そこでハイデガーは、「基礎づけの危機」を持ち出しつつ、この危機の克服を「根本諸概念の修正 *Revision*」に求める (vgl., SZ, 9)。そして学問的研究の水準は、「その学問が自らの根本諸概念の危機にどの程度まで対処できるか *fähig*」によって決定されるとされ、ハイデガーはここに「諸学問の本来の「運動 *Bewegung*」」を看取するのである (vgl., SZ, 9)<sup>15)</sup>。ハイデガーによれば、危機に直面した際の、この「根本諸概念」の改変という試みは、諸学問のあいだでの知識交換や、別の概念を「根本諸概念」に付加する仕方では果たされない<sup>16)</sup>。「根本諸概念」が改変されるのは、諸学問よりも根源にある哲学を、ひいては従来の哲学を基礎づける基礎的存在論を、まずもって着手することで成就される<sup>17)</sup>。つまり「先行的で、根本諸概念を汲み上げる研究とは、この存在者 [= 現存在] をその存在の根本体制へ向けて解意することを意味するに他ならない」のであって、この作業は「規定された存在領域にいわば率先的に飛び込み *vorspringen*、その存在領域をその存在体制のなかでまずもって開示し、獲得された諸構造を、〔根本諸概念を〕問うための見通しを与えるような諸々の手引き *Anweisung* として、実証的な諸科学 [= 学問] の意のままにさせる」という仕方で遂行されるのである (vgl., SZ, 10)<sup>18)</sup>。そうならば、「根本概念」への問いは、哲学がまずもって基礎的存在論に着

手し、諸学間がその成果を受け取るという手順によってはじめて可能となるということになろう。この意味で、基礎的存在論は、諸学間が自らの「根本諸概念」を是正するための道標を与えるという役割を担うことになり、ここで哲学と諸学間は、「根本概念」の動揺を支柱として密接に絡み合うことになるのである。現存在の存在を諸学間に先立って、先導的に問うことは、諸学間に対して、その学間の危機を乗り越えるきっかけを与えるという役割があり、また諸学間は基礎的存在論を遂行する哲学に追従しつつ、自らの概念を問い直さないかぎり、危機のままにとどまる。『存在と時間』に先立つ、1925年の講義『時間概念の歴史への序説』では、「その都度の学問の根本諸概念の不明瞭性」(20, 3)を、これまでに述べたような哲学と諸学間との連動性によって克服する動向、これが「学問における革命 Revolutionierung」(20, 6)と呼ばれている。ここにおいてわれわれは、『存在と時間』の意義を、以下のように定めることが可能となる。つまり、基礎的存在論を「現実的な生」の分析を徹底化したものとみなすならば、そして「現実的な生」の分析が、「学問の危機」に対処する唯一の方途であったとするならば、『存在と時間』の現存在の分析論全体は、「根本概念」の修正を媒介とした、従来の哲学と諸学間の基礎づけを目指す大々的な試みだったということであり、それがまさに大学改革の構想の支柱となっている、ということである<sup>19)</sup>。

諸学間は、漠然と理解されている生物、数字、文化等の「根本概念」を、現存在の存在の分析論たる基礎的存在論の成果を受け取ることによるのみ、問い直すことが可能となる。したがって哲学は、諸学間が危機を脱しうるために、諸学間が問えない次元の問題に着手しなければならないことになろう。1923年から24年の講義『現象学的研究への入門』において、哲学は大学のなかのひとつの分野を超えて、端的に現存在へと方向づけられることが要請されている。哲学は「分野から、現存在そのものに対して自由になること *Freiwerden von der Disziplin für das Dasein selbst*」を通じて、「現存在を現存在自身によって規定された研究の主題にする」ことを、必須の課

題として課せられることになる (vgl., 17, 112)。そしてこうした現存在の存在構造を問う作業そのものが、「伝承されてきた諸可能性と伝統的な様式から自由になること」にもつながるとされる (vgl., 17, 112)。つまり、この作業が、「意識、人格、主体という根本的カテゴリーを、それらの起源の意味に引き戻し、[...] それらが存在経験の全く別の基盤の上に生じていること」を掘り起こすものであるという点を考慮すれば、それはまさに哲学による哲学自身の「根本概念」の自己批判となるだろう (vgl., 17, 113)。『存在と時間』での基礎的存在論に限定しても、現存在という術語自体、主体や魂などの伝統的な概念の問い直しを背景としつつ使用されていたのであって、こうした問い直しによって得られた成果——これは「実存範疇 Existenzialien」(SZ, 44) のことであるが——に基づいて、各々の諸学問は自らの「根本概念」を是正することができるのである。そしてこうした諸学問の「根本概念」の是正という役割を、現存在の分析論が引き受け、それを遂行することで、「新たな諸学問の設立 Konstituierung neuer Wissenschaften」(17, 269) にもつながると、ハイデガーは考えるのである。こうしてみれば、現存在の分析論は、諸学問の危機の打開という機能を、引き受けるものだといえそうである。

以上から、「学問における革命」を試みたハイデガーの大学改革の内実とは、まず動揺する「根本諸概念の危機」を巡って、哲学と諸学問とが、それぞれの「概念性に対する責任」を引き受けることを意味する。そしてさらに、基礎的存在論として遂行される哲学が、自らの伝統的な「根本概念」を諸学問に先立って再考し、そこで得られた成果を諸学問へと譲渡することを意味する。そして最後に、諸学問が哲学の場で得られた成果を「手引き」として能動的に受け取ることで、自らの「根本諸概念」を根本的な立場から問い直すこと、ここに至って、大学における哲学と諸学問の改革は達成されるのである。こうした事態からわれわれは、ハイデガーの大学改革の試みのなかに、「根本概念」の是正を巡る、哲学と諸学問との動的な関係を看取することができるだろう。

### 3. 学問の自己省察への促しとしての哲学

「根本概念」の問い直しと是正は、哲学が自らの諸概念を問い直しつつ、諸学問が哲学の成果を受け取ることによって遂行されていたが、ここにハイデガーは諸学問の哲学化ともいうべき事態を見出し出している。まず注目したいのは、1936年から1940年の講義『ニーチェ』（以下、講義『ニーチェ』と略記）で明言されている、諸学問が自らの「根本概念」を独力で解明することの不可能性である。「学問は、自らの固有な学問的手段によっては、自らについて何事かを語ることはできない」（6-1, 332）。この主張の意味は、もし諸学問が自らの「根本概念」を、哲学の助力なくして問うばあい、その問いかけはすでにして既存の「学問的手段」に規定されてしまっているため、それは「根本概念」の修正にとって無力であるということである。つまり、その問いかけには、当該の学問の特定の概念が必然的に含まれてしまうことになり、動揺する「根本概念」を解明するために、同じくその意味の画定が十分ではない概念を用いざるをえないことになり、当該の「根本概念」の意味内実を確保することはできないのである。したがって、諸学問の理論の支柱である「根本概念」の是正は、諸学問の内部では不可能であり、諸学問よりも根本的な立場にある哲学の概念を、その是正のための一助として受け取ることが必要不可欠となるのである。ハイデガーいわく、こうした過程のなかで生じるものがまさに、諸学問の「哲学への越境 Übertritt in die Philosophie」（6-1, 332）であり、「ひとつの跳躍 [=飛び込み] *Sprung*」（6-1, 470）である。それはつまり、哲学が「根本概念」の修正の手立てを諸学問に与える機能をもつならば、諸学問がそうした哲学の成果を受け取ることそのことが、諸学問が「個別学」としての垣根を越えて、哲学へと「跳躍」ないし「越境」することにつながるということを指していると思われる。いわば哲学は、この「跳躍」や「越境」を諸学問に課すのであり、また諸学問はその「跳躍」や「越境」を引き受けることによってのみ、自らの「根本概

念」を修正することができるのである<sup>20)</sup>。

このようにみれば、哲学は、諸学問を自らの「根本概念」を問いえるようにさせるという機能をもっていることになろう。さらにそのばあい、諸学問は「個別学」としては問題にできなかつた次元へと、哲学によって開かれることになるだろう。「ドイツ大学の自己主張」によれば、大学改革は特定の存在者の領域ではなく、存在者全体を問題視する哲学によって担われる(vgl., 16, 109)。そしてそれは、「諸学問が特殊な専門課目へと自閉してゆくことを砕く」ことによって、「学問を再度直接的に建立する」ことにつながると述べられている(vgl., 16, 111)。つまり「根本概念」を修正しようと試みる諸学問は、従来の哲学の概念を問い直す哲学に促されることによって、自らの細分化された対象領域を超えて、存在者全体へ問うことへと導かれるのである。

ハイデガーは、こうした諸学問の「哲学への越境」を、かなり早い段階から構想していた形跡がある。1916年の論文「歴史学における時間概念」では、「様々な諸学問の研究方法は、一定の根本諸概念と協働するのであり、まさにそうした根本諸概念の論理的構造へと、学問論は省察しなければならない」とされ、「学問論の考究が個別学の研究者にとって有意義となるのは、個別学の研究者が、そうしたものとしての自らを忘却するばあい、つまり哲学するばあいであり、ただそのばあいだけである」と主張されている(vgl., 1, 416f.)。先述したが、学問のあるべき姿とは、その学問の研究を推進させている「根本概念」の精査であり、世間一般に通用する成果を新たに生み出してゆくことにはない。そして上記引用から明らかとなるのは、「根本概念」の精査が可能となるのは、そしてそれによって「個別学」の研究に意味が与えられるのは、「学問の危機」において、「個別学」が自らの立場から離れつつ、哲学的な問いへと歩みを進めるばあいのみである。したがってハイデガーは、この事態を踏まえ、「危機における学問的研究は、哲学的な傾向を獲得する」(20, 4)とまで述べることができたのである。「根本諸概念」が動揺す

る「学問の危機」を打開する方法、それは哲学がまずもって、自身の概念の概念性を問い直すことをつうじて、諸学問がその哲学的成果を獲得しつつ自身の問いのなかで活用することであり、かつまた自身の対象領域や方法上の制約を取り去ることで、自らの対象領域をより根本的な立場——つまり、存在者全体を扱う哲学的な立場——から問い直すことなのである<sup>21)</sup>。

では、このような諸学問の哲学化という主張によって、ハイデガーは多様な学問を、哲学へと一元化することを考えていたのだろうか。「個別学」としての諸学問が、自らの対象領域の制約を超え、存在者全体を問うという哲学の問題圏へ飛び込むことを課せられているとすれば、そこで生じる事態は、「個別学」の消失であるとも考えられよう。ハイデガーはこの点に関して、明確に説明してはいない。しかし、もし諸学問の哲学化によって、諸学問の哲学への一元化が思考されていたとすれば、そこには「根本諸概念の修正」という課題の意味が薄れてしまうように思われる。なぜなら、「根本諸概念の修正」とは、諸学問が哲学への越境を果たしつつも、それによって是正された「根本概念」を、当該の諸学問自身が使用することにごそ意味があると思われるからである。先述したように、講義『ニーチェ』では諸学問の「哲学への越境」が主張されているが、それと同時にこの事態が、諸学問の哲学への一元化による、諸学問の消失ではないこともまた述べられていることは、注目に値する。ハイデガーはそこで、諸学問に哲学的な問題圏への飛び込みを課すことが、「哲学による諸学問の撤廃を意味するわけではない」と断言しつつ、それが「すべての学問のなかに隠されているより高次の知——そこに学問の尊厳が身を置いているような知——を承認すること」につながると述べている (vgl., 6-1, 470)。これまでの議論を振り返ると、ここから読み取れるのは、哲学による諸学問の抹消ではなく、諸学問が動揺する自らの制約された知を、諸学問の側からは捉えられない根源的な存在者全体に関する知——つまり、哲学的な観点を踏まえた知——から据え直すことで、諸学問が自らの存立を強固にする事態であるといえるだろうし、ここではじめて



その地位を失墜させられた「学問の尊厳」が回復されるといえよう。つまり、ハイデガーが諸学問の「哲学への越境」を求めるばあい、それは哲学への一元化ではなく、逆に多様な諸学問が、自らの危機を哲学的な観点を獲得することで克服し、それによってわれわれの生にとっての、諸学問の意味を取り戻す事態であるといえるだろう。そしてそれは、動揺していた「根本概念」を哲学的な観点から修正しつつ再獲得するなかで生じてくるのである。

さらに諸学問の哲学化は、諸学問が自らの対象領域の制約性に対して、自覚的になるようにさせるという意味も込められていると思われる。そもそものところ、諸学問自身は、その研究に邁進するなかで、自らの対象領域に制約があるということには、必ずしも自覚的になっていないことだろう。数学であれ、物理学であれ、神学であれ、それぞれの学問は数、物体、神等の観点を前提としつつ、存在者全体を秩序づけて説明するのであるから、各々の学問は、自らの対象領域が制約されていることには、研究を進める上では気づかないはずである。したがって、哲学が存在者全体を問題にするかぎり、諸学問がそうした哲学を範にとるということには、諸学問が無自覚であった自らの対象領域の制約性に、改めて自覚的になることにもつながるだろう。つまり、諸学問の哲学化とは、「学問が、存在者への根本的諸境位のなかで運動し、これを自らの研究のなかで発揮させる」(6-1, 333) こととして、存在者全体への問いへと開かれることであると同時に、この越境によってはじめて諸学問は自らを「個別学」として明確に打ち立てることが可能となるような事態なのである。ハイデガーが「哲学への越境」において、「学問的に知る価値のあるものの諸限界 Grenze を自らで画定しうる」(6-1, 469) と述べるのも、まさに以上のような哲学を経由した諸学問のいわば個別学化を念頭においてのことだろうし、それは諸学問が自らの観点と対象領域の限界に自覚的となる事態なのである。後年の『ツォリコーン・ゼミナール』<sup>22)</sup> では、「存在が存在者ではないかぎり、存在者と存在との区別は最も根本的で、最も困難な区別である」(ZS, 20f.) とされつつ、諸学問が存在を看取すること

の不可能性が主張される (vgl., ZS, 21)。そして存在を問題にするには、「覚知 [= 認取・聴き取ること] Vernehmen という固有な準備」をつうじて、存在と存在者との差異化がなされることが必要とされるのだが、諸学問がこの「覚知」へ至ることの不可能性は、「学問 [= 科学] を放棄することではない」とされ、逆にそこでこそ「学問 [= 科学] への、思慮深く、精通した関わり」が達成され、「学問 [= 科学] の限界を真に考え抜くこと」が可能となると主張されている (vgl., ZS, 21)。このように、哲学の遂行は、諸学問を哲学的な問題圏へと誘いつつも、そのなかで諸学問が諸学問たる所以に気づくようにさせることにもつながるのであって、それは諸学問が自らの立場の限界を見極められるように、諸学問自身に対して自己省察を促すことによってなされるのである。そしてハイデガーは、こうした一連の動向のなかにこそ、哲学と諸学問との協調関係を見て取っている。つまり哲学の遂行、諸学問の哲学化、そして諸学問の意義の回復のなかで、「哲学的思惟と学的研究とのあいだに、ひとつの深い相互了解 Einverständnis が可能となる」(6-1, 334) と述べるのである。

### おわりに——大学改革のその後、および残された課題——

以上から、「根本概念」の動揺という学問の危機の克服を巡る、哲学と諸学問との連動という視座が、ハイデガーの大学改革論の支柱として解明されたことになる。そして、その連動には、哲学の先導的な遂行によって、諸学問が哲学化され、自らの理論の土台を問い直し、その尊厳を回復するという事態が含まれている。この意味でハイデガーの哲学は、諸学問の自己省察への促しとして機能する側面があるのである。しかし、後年のハイデガーは、こうした哲学と諸学問との連動性を積極的には語らなくなってゆく。

1934年から35年の「芸術作品の根源」では、諸学問の哲学化にまだまだ期待がかけられていた。「思索者が問うこと」としての「存在の思索」こそが

「真理」を開示するのに対し、「学問は真理の根源的な生起ではない」とされるものの、「存在の思索」と諸学問の研究は、「学問が正しさを超えて、真理に、すなわち本質的な存在者そのものの暴露に至る」ばあいには、「学問は哲学である」と述べられており、この点からみると、諸学問の哲学化への可能性は、まだ残っている<sup>23)</sup>。しかし1935年の講義『形而上学入門』では、「学説や研究に向かう個別学を寄せ集めた組織が、大学と呼ばれるならば、大学はかろうじて単なる名前に過ぎない」(40, 52)と嘆かれつつも、こうした大学の状況を哲学と諸学問との連動性によって改変しようとする試みは、もはや主張されることはなない。「学問は、今日ではそのすべての領域において、知識の獲得と伝達という技術的で実践的な事柄」であるかぎり、そうした学問から「精神の喚起が生まれることは決してない」(vgl., 40, 52)。さらに1938年の「世界像の時代」では、近代以降の哲学以外の諸学問の専門化が、「研究としての学問に属する本質的な必然性」とみなされ、特殊化する諸学問を、哲学の領域へと促すという試みは放棄されているように思われる。いわばハイデガーにとって、諸学問の専門化という動向は、哲学の遂行という人間の営みによっては、阻止しがたいものとみなされてゆくのである。こうしたハイデガーの変化は、1953年の講演「学問 [= 科学] と省察」においてひとつの到達点に至る。そこでは学問を統治しているのは人間ではなく、「一層巨大な運命 *Geschick*」「ある別のもの *Ein Anderes*」と説明され、さらにこの「ある別のもの」は、「その諸学問自身には隠れたまま」にとどまるとされる (vgl., 7, 39f.)。「[諸学問の] 理論は現実的なものを [...]」ひとつの対象領域へと確立するのだが、そこでは自然はつねにすでに自らの側から現成している」(vgl., 7, 55)。したがって、諸学問は諸学問に先立ち、かつ諸学問が暗黙の内にそこに依拠している自然——これは「ピュシス」と呼ばれるが——を決して経験できないのである。こうした自然は、諸学問にとって「不可避なもの *das Unumgängliche*」(7, 56)として隠蔽されたままである。そして、この「不可避なもの」を経験する方法は、「自らを意味 *Sinn*へ

と解き放つこと」としての「問うに値するものへの放下 Gelassenheit」であり、「省察」となるのだが、その「省察」はもはや諸学問に対して何ら積極的な貢献をするものではない (vgl., 7, 63)。ただ「各々の諸学問の研究者や教員、学問を通過する各々の人間は、省察の異なる水準において思索する存在者 Wesen として動き、省察を覚醒させておくことはできる」と述べるところをみると、ハイデガーは諸学問の研究方法から「省察」への移行の可能性を完全に奪ってはいないようにもみえる (vgl., 7, 65)。だがしかし、諸学問の専門化は、人間の恣意には還元できない「不可避なもの」に依拠するかぎりにおいて、「不可避なもの」が隠されたままの諸学問の研究領域と「不可避なもの」を経験する「省察」の領域とのあいだの相互関係の樹立は、ほぼ不可能と思われようし、哲学と諸学問とのあいだの「ひとつの深い相互了解」も期待できないと診断してもよいと思われる。

駆け足になったが、このような後年における哲学と諸学問の相互関係の如何、およびその是非に関しては、また稿を改めて論じる必要があるだろう。また1937年の「討議への道」で述べられているように、哲学と諸学問との「相互理解」が「交互に自己を - 問い - のなかに - 据える Sich-in-Frage-Stellen という、ひとつの闘争 Kampf」(13, 20) によってのみ生起するとすれば、ハイデガーは、いわば哲学を営む者と諸学問を営む者との「闘争」関係を、他者との本来の関わり方として思考していたとも考えられる<sup>24)</sup>。こうした今後解明すべき問題点が多々が残るのは確かだが、本稿は、ハイデガーの大学改革の内実を、哲学が自らの「根本概念」を問うことで、諸学問もまた自らの「根本概念」を問うように促し、諸学問が自らの研究の限界に対して自覚的になる事態であったということ、これを明らかにしたことで、最初に掲げた目標に到達できたと思われる。そしてまた、このハイデガーの試みには、判然としない概念を無批判に乱用するのではなく、哲学であれ、諸学問であれ、自らの使用する概念に対しては確固たる責任を持たねばならないという批判が込められていると思われ、こうした点は学問の細分化が着々と進行して

いる現代においても積極的に評価できるポイントではないかと考えられるのである。

### 【凡例】

原文からの引用、および原文中の「」は、すべて「」にて表記する。

原文のイタリックは、傍点にて表記する。

論者の補足は〔 〕ないし [= ]にて表記し、省略は […]にて表記する。

ハイデガーの文献は、Vittorio Klostermann から刊行中の Martin Heidegger, *Gesamtausgabe* を使用し、引用の際には、巻号と頁数とで表記する。『存在と時間』は、*Sein und Zeit*, Max Niemeyer, 2001, 18. Aufl. を使用し、略号 SZ と頁数とで表記した。その他の文献については、適宜註にて指示した。

### 注

- 1) 本稿では、ドイツ語の *Wissenschaft* を「学問」と訳出している。ハイデガーにおけるこの語の射程には、哲学以外の自然科学や人文学等、すべてが含まれている。しかし文献の内容上、特に「科学」という意味を強めているばあいは、「学問 [= 科学]」と表記する。さらに哲学を含めた意味で「学問」という語を使用するばあいは、本文中にて分かるように記載する。
- 2) Hannah Arendt, "Martin Heidegger ist 80 Jahre alt", in *Merkur Deutsche Zeitschrift für europäisches Denken* XXIII, 1969, S. 893. ヴィラは、このアレントの寄稿論文を、師であるハイデガーのナチズム参与の責任免除を企てるものであり、ごまかしであるとするエティンガーやウォーリンの批判を参照しつつ、それがハイデガーの弁明ではなく、逆に告発につながると診断している (cf., Dana R. Villa, *Politics, Philosophy, Terror. Essays on Thought of Hannah Arendt*, Princeton University Press, 1999, pp. 81-86 [デーナ R. ヴィラ『政治・哲学・恐怖 ハンナ・アレントの思想』伊藤誓、磯山甚一訳、法政大学出版局、2004年、126-130頁])。[「80歳のマルティン・ハイデガー」、および『精神の生活』におけるハイデガー批判でのアレントの主眼は、思考活動が現れの世界の「汚れ」を洗い落として純粹するとき、思考活動と判断活動の結びつきは失われる、ということである。純粹な思考とは判断力の死であるということ、これが彼女の驚くべきテーゼである。このテーゼは、彼女がハイデガーの政治的な愚かさについて考察して得た結論であり、人間の事象の領域への哲学の伝統的態度に対する彼女の懐疑とも呼応している。加えて、『イェルサレムのアイヒマン』で彼女が描く「思考停止した thoughtless」アドルフ・アイヒマンの肖像とも呼応しているのである。[… ] ハイデガーとアイヒマン、二人は結局つながっているのである」(Ibid., p. 85)。

- 3) Hannah Arendt, "Martin Heidegger ist 80 Jahre alt", 894ff..
- 4) ベゲラーは「思索は、ある特定の時期には、国家社会主義革命を、大学の改革によってはじめて、その精神的な基盤の上に据えるというハイデガーの目標であった」(Otto Pöggeler, *Neue Wege mit Heidegger*, Alber, 1992, S. 204)と指摘する。確かにハイデガーの大学改革論は、1930年代の彼のナチズム参与と切り離せないが、ベゲラーはこれを強調するあまり、ハイデガーの試みの学問的動機を正当に評価できていない。またレーマンは、1930年代における大学改革を通じた国家の統制という意図が、ハイデガーの初期講義に表れているとする。「諸講義を吟味するばあい、上述の政治的主题に対する一貫した取り組みが表れている。大学の「革命的」変革の必然性に関して、ハイデガーは下記の1919年「戦時下緊急講義」のあいだに、はじめて表明していたのだ。[...] つまり「革命」は、ハイデガーが政治的な治癒のひとつの方法とみなす哲学によって十分に到達されるべきなのである」(Gorge Leaman, *Heidegger im Kontext. Gesamtüberblick zum NS-Engagement der Universitätsphilosophen*, Argument-Verlag, 1993, S. 120)。もちろん、ハイデガーが「政治的な治癒のひとつの方法」として哲学を位置づけたことはありえることである。しかしレーマンは、本稿が明らかにする哲学と諸学問との連動性という学問的側面に全く目を向けていない。論者は大学改革の政治的意味を否定しないが、そうした解釈によって見落とされがちな大学改革の学問的動機とその意味もまた重要だと考える。
- 5) 創文社から刊行中のハイデッガー全集第56 / 57巻『哲学の使命について』の訳者である北川東子氏によれば、「大学と学術研究の本質について」のハイデガーによる自筆草稿は発見されておらず、全集に収載されているものは、学生の筆記ノートから再構成されたものである(マルティン・ハイデッガー『哲学の使命について』北川東子、エルマー・ヴァインマイアー訳、創文社、1993年、232頁)。また北川氏は、上記全集の訳者後記において「すでに1919年のハイデッガーにとって、政治的・歴史的な「状況」と「大学の学術研究」のありようとの間の関係は哲学の主題であった」と述べている(上掲書、232頁)。
- 6) 茅野良男氏は、「ハイデガーの大学論」(『実存主義』第47号、以文社、1969年)において、「『ハイデガーの大学論』という課題は、大学論が学問論、科学的思考と哲学的思考との区別、人間の本質としての思考などの問題を包括するなら、ハイデガーの哲学全体の見通しから応答すべきものであろう」と述べているが、この論文では「ドイツ大学の自己主張」のみを取り上げており、初期ハイデガーの大学への言及にはふれられていない(上掲論文、34頁)。また同著者の『初期ハイデガーの哲学形成』(東京大学出版会、1972年)においても、初期の大学論は言及されていない。
- 7) István Fehér, "Fundamental ontology and political interlude: Heidegger as Rector of University of Freiburg", in *Martin Heidegger Critical Assessments IV*, edited by Christopher Macann, 1992, p. 159.



- 8) 渡辺二郎『ハイデッガーの実存思想』勁草書房、1962年、196頁。渡辺は、第一次世界大戦後のヨーロッパの荒廃とその時代背景を簡潔にまとめ、ハイデッガーを含む他の当時の哲学者が、認識論の哲学を超えた人間存在の具体的な現実を凝視する方向に向かったと診断している。「時代は、明らかに、先験的意識に拠る認識論の哲学を超える方向に進んでいた。まさしくこのことは、第一次世界大戦の混乱を契機として、近世的な認識論の論理学が瓦解され、具体的な生の現実、或いは存在への下降の道が求められ、人間の理性的意識一般的側面よりも、根本の人間存在という、動かし得ない、知的なものに先行する、端的なその事実性、現実性というものへの注目が、いまやあらゆるものの破壊の体験と相まって、漸く起こりつつあったということであろう」(上掲書、196頁)。「大戦後、『存在と時間』を出すまで、ハイデッガーの思索の関心は、明らかに、認識論の論理学的問題を超越、破局の中で、暗さも明るさをも含んだ人間存在そのものへと向かっていたことは、容易に洞察されよう」(上掲書、201頁)。
- 9) 1919年から1920年代初期のハイデッガーの思索傾向には、「普遍的な存在」へ向かう動向と同時に、「現実的な生」への動向も含まれており、ハイデッガーは特に後者の解明のための方法論の案出に苦心していた。なぜなら、すでにそのなかで生きている生を、何ら変様を加えずしてそのまま抽出することは不可能と思われるからである。「解釈学的直観 Hermeneutische Intuition」(56/57, 116)や「覚知 Kenntnismahme」(58, 110)といった数々の発想は、諸学問のように「脱・生」せずして、「現実的な生」に接近するという哲学の使命に忠実であろうとする、ハイデッガーの尽力の結果である。こうしたなかで、『存在と時間』の本来性の議論を先取りしたかのような、「現実的な生を自己世界へと尖鋭化すること」(58, 59f.)といった方法も案出されている。こうしたなか、ハイデッガーは「現実的な経験の変様 Modifikation」(58, 114)を抽出する方向へ向かうのだが、それは「現実的な経験の変様」へと「自らを置き移すこと」「経験連関についての覚知と共に生き生きと進むこと」とされる(vgl., 58, 124f.)。
- 10) 講義「宗教現象学序説」において、「キリスト教的な生の経験の転換は、遂行と関わる[...] 遂行現象は、現実性意味としっかりと絡み合っていないなければならない。パウロは、そうした遂行を主題にあげた」(60, 121)と言及しているように、ハイデッガーはこうした「現実的な生」を全体的に把握しようとする試みの模範を、パウロに見出している。
- 11) 松本氏は、ヤスパースとの対比を通じてハイデッガーの大学論を論じつつ、ハイデッガーの大学が「民族の大学」である点に、「超民族的な「人類の理念」に奉仕するヤスパースの大学との決定的な違いを指摘する(松本啓二郎「ハイデッガーと大学の理念——ヤスパースを手がかりにして——」(『科学と技術への問い ハイデッガー研究会第3論集』所収、理想社、2012年、66頁))。そこではハイデッガーの「民族」は、「[[ドイツ民族]という歴史的存在的な次元ではなく、「存在者全体」を見据えるような、存在の本質に関わる存在論的な次元でこそ理解されるようなものなのである」と診断され



ている（上掲論文、67頁）。

- 12) 例えば『存在と時間』の以下の言及を参照のこと。「歴史の歴史的な開示 *die historische Erschließung von Geschichte* は、それ自体に即してみれば、それが現実に遂行されるか否かには関わりなく、その存在論的構造にしたがって、現存在の歴史性 *Geschichtlichkeit* に根差しているのである」（SZ, 392）。
- 13) 総田純次「眼前性の概念の多義性と問題系の変遷——事実性の解釈学から基礎存在論へ——」（『ハイデガー『存在と時間』を学ぶ人のために』所収、宮原勇編、世界思想社、2012年、146頁）。したがって、諸学問は、断片化された生を扱うのであり、学問の専門化は生を十分に捉えられないのである。これをうけ、ハイデガーは「形而上学とは何であるか」において、専門化された諸学問によって成立している大学の現状を憂いている。「諸学問の領域は、互いに遠く離れている。諸学問の領域の諸対象の取り扱いは、根本的に異なっている。諸学科のこの瓦解した多様性は、今日ではもはや諸大学と諸学部とを技巧的に組織化することによって纏められているにすぎず、諸々の専門分野の実践的な目的設定によって、ひとつの意義の内に保たれているのである。それに対して、諸学問がそれぞれの本質的な基盤に根を張るということは、死滅している」（Martin Heidegger, “Was ist Metaphysik?”, in *Wegmarken*, Vittorio Klostermann, 1978, 2. Aufl., S. 104）。
- 14) マンハイムもまた「根本概念」の動揺をうけて、学問の「危機」を述べていた。「人間の精神はまったく解明されていない諸概念を使って、不思議な仕方、大変明瞭な観察をすることができるということ、そして、この観察が反省され、諸学科の根本諸概念を定義せざるをえないようなばあいには、はじめて危機 *Krise* が突発するということが、こうした既知の命題以上に正しいものはない。この命題が正当であることの証明は、個別諸学問においては、根本諸問題や根本諸概念を巡って、激しい闘争が行われているのに、研究がしばしば経験的に確保されつつ進展しているということである。」（Karl Mannheim, *Ideologie und Utopie*, Vittorio Klostermann, 1985, 7. Aufl., S. 89〔カール・マンハイム『イデオロギーとユートピア』鈴木二郎訳、未来社、1968年、77頁〕）
- 15) 全文は以下の通りである。「諸学問の本来の「運動 *Bewegung*」は、多かれ少なかれ徹底的で、その運動自身にとっても透明な仕方、根本諸概念を修正することのなかで行われる。ある学問のレベルは、その学問が自らの根本諸概念の危機にどの程度まで対処できるか、ということに基づいて規定される」（SZ, 9）。この箇所は、全集版および Max Niemeyer 14 版以降のテキストとそれ以前とは異なっている。全集版および Max Niemeyer 14 版以前では、「この運動自身にとって透明である仕方、根本諸概念を修正する *in ihr selbst durchsichtigen Revision der Grundbegriffe*」となっており、*selbst* と *durchsichtigen* の間に *nicht* が無い。この点を指摘した論文に、平田裕之「ハイデガーにおける科学と「運動」」〔紀要 第 202 号〕、2004 年 4 月、中央大学文学部、69 頁以下〕がある。氏によればこの変更は「ハイデガーの意図が、さらにいえば、『存在

と時間』を執筆した当時の彼と後年の彼との考え方の違いが象徴的に表れている」(上掲論文、71頁)のであり、nichtを加えたのは、学問すべてを「存在史」に組み込み、それらの主体的な努力を考慮しない後年のハイデガーの思索の変遷の結果であると氏は診断している。こうした変更は本稿の議論展開の障害となっていないが、平田氏の指摘の価値は極めて高いと思われる。

- 16) 1929年の「根拠の本質について」では、学問の内部における「根本概念」の根拠の発見不可能性が主張されている。「今日の学問の根本諸概念は、〔その学問に該当する〕当の存在者の存在についての「本来的な」存在論的概念をすでに含んでおらず、またこの「本来的な」存在論的概念は、今日の学問の根本諸概念を「適度に」拡張することによってだけでは、獲得され得ないのである」(Martin Heidegger, "Vom Wesen des Grundes", in *Wegmarken*, Vittorio Klostermann, 1978, 2. Aufl., S. 131)。
- 17) 鷲原氏はこうした基礎的存在論の役割に関して、「存在問題を取り上げることは、それが基礎的存在論として諸々の存在論を基礎づけると同時に、実証的諸科学を基礎づける問題であるという二重の意味において基礎づける存在論である」と述べている(鷲原知宏『「存在と時間」期の科学論』(『科学と技術への問い ハイデッガー研究会第3論集』所収、理想社、2012年、40頁))。
- 18) ハイデガーはこうした基礎的存在論の学問的意義を考慮し、それを「生産的〔=先導的〕論理学 produktive Logik」(SZ, 10)と呼んでいる。ここで提起されている論理学の内実は、本稿では議論できないが、1925年のカッセルでの講演における以下の言及は参考になる。「したがって、歴史的 - 哲学的な問題設定は、存在そのものへ向かう基礎的な問いへと連れ戻される。われわれはこの問いを立てねばならないのだが、それはわれわれがギリシア人のもとの、存在への最初の学問的な問いとの連続性を保ちながら、その正当性と根本的な限界を探究するようにしなくてはならない。学問的哲学を再度、その現実的な諸主題に立ち返らせることに成功すれば、そうした研究が諸学問にとって実り豊かな効果をもたらすという保証が得られ、論理学は諸学問の手順を後追いついて定式化するのではなく、根本諸概念を開示するような、〔諸学問の手順に〕先駆ける導き手 Führerin であるという保証も得られるのである」(Martin Heidegger, "Diltheys Forschungsarbeit und historische Weltanschauung", in *Dilthey-Jahrbuch für Philosophie und Geschichte der Geisteswissenschaften*, Bd. 8, Vandenhoeck & Ruprecht in Göttingen, 1993, S. 177)。
- 19) ゲートマンは、こうした基礎的存在論の役割を大きく強調し、『存在と時間』を読解している。「諸学問の基礎づけの問題は、問題そのものであり、基礎的存在論は、その問題の解決へと方向付けられている。〔…〕学問を基礎づける理論が、基礎的存在論の構成を方法論的に導いているのである。それゆえ、諸学問とそれらの存在論的基礎づけは、ハイデガーにとって〔…〕教育的な範例というだけでなく、決定的な「試金石」なのである」(Carl Friedrich Gethmann, "Der existenziale Begriff der Wissenschaft", in

*Lebenswelt und Wissenschaft. Studien zum Verhältnis von Phänomenologie und Wissenschaftstheorie*, herausgegeben von Carl Friedrich Gethmann, Bouvier Verlag, 1991, S. 187)。また他方で、こうしたゲートマンの解釈への異論も提出されている。モサデクは上記のゲートマンの解釈が、基礎的存在論による学問の基礎づけという役割を高く評価し過ぎていると診断したうえで、「ハイデガーによれば、学問の問題は、確かに基礎的存在論の枠内においてのみ検討されるべきなのだが、それは基礎的存在論、ないし哲学の中心課題が、学問の基礎づけであるということ、全く意味しない」と主張している (Ismail El Mossadeq, *Kritik der neuzeitlichen Naturwissenschaft. Phänomenologie in der Alternative zwischen Husserl und Heidegger*, Amsterdam, 1995, S. 109)。本稿は、「学問の危機」の克服という観点から、ハイデガーの大学改革という試みを読解するものであるから、この点でゲートマンの解釈を採用しているが、双方の見解の相違に関しては、今後の課題としたい。

- 20) ベゲラーも、こうした哲学と諸学問との連動性に触れている。「学問 [= 科学] がハイデガーにとって興味深くなるのは、学問 [= 科学] が基盤についての論争のなかで、自らの前提を問いにふすばあいである。ハイデガーが後に、学問 [= 科学] は思索しないと述べたとき、それが意味していたのは、学問 [= 科学] が思索するばあい、したがって、学問 [= 科学] が自らの研究の前提を議論の俎上にあげるばあい、学問 [= 科学] は哲学となるということにすぎない。といっても、哲学は、ハイデガーにとって学問の基礎づけにのみとどまるものでは決してなく、同時に、いや第一義的には、芸術や政治のような学問 [= 科学] 以外のものと結びついた」(Otto Pöggeler, *Heidegger und die hermeneutische Philosophie*, Verlag Karl Alber GmbH, 1983, S. 397)。このようにベゲラーは、諸学問の哲学への越境を指摘しているが、あまり高く評価しておらず、またハイデガー自身も重視していなかったと理解しているようである。
- 21) 鷲原氏もこの点に触れ、「『存在と時間』期の科学論とは、「科学の基礎づけ」というよりは、「科学の哲学化」であったと言えるだろう」と診断している (鷲原知宏『『存在と時間』期の科学論』(『科学と技術への問い ハイデッガー研究会第3論集』所収、理想社、2012年、49頁))。
- 22) Martin Heidegger, *Zollikoner Seminare*, Vittorio Klostermann, 2. Aufl., 1994. 以下、引用の際には略号 ZS と頁数にて表記する。
- 23) Martin Heidegger, "Der Ursprung des Kunstwerkes", in *Holzwege*, Vittorio Klostermann, 1980, 6. Aufl., S. 48.
- 24) この問題は、「教師と学生との闘争共同体 die Kampfgesellschaft der Lehrer und Schüler」(16, 116) としての、ハイデガーの本来的「共存在 Mitsein」(SZ, 113) の議論やハイデガー的な意味での政治の問題につながると考えられるが、本稿では紙幅の都合上、扱うことはできない。

